

# 令和6年度 学校評価報告書

学校名	三田市立すずかけ台小学校
-----	--------------

## 1 学校教育目標

夢に向かって共に歩むすずかけっ子の育成

## 2 今年度の学校重点目標

『よい授業は よい学級を導き よい学校を創る』  
 (1) よい授業づくり(2)よい学級づくり (3)よい習慣づくり (4)よい環境づくり  
 (5)地域とともにある学校づくり

## 3 総合的な自己評価

「また明日も来たい学校」を合言葉に、教育活動の充実と日々の授業改善に全職員で取り組んできた。児童同士のつながりを意識した教育活動に力を入れ、「あいさつロード」や「すずかけタイム」の取り組みの成果も出てきている。不登校や登校渋りの児童の安心できる居場所のひとつとして、サポートルームを設置し、運用を進めることができてきた。今後も学校運営協議会を母体とし、家庭や地域との連携・協働を一層深め、地域に根ざした児童の育ちや学びの姿を共有できるようにしていきたい。タブレット等の ICT 機器の活用が日常化し、児童は自分の考えたことをまとめたり、表現したりすることに活用できている。まなびポケットを使った保護者との連絡ツールとしての利用の幅もひろげ、業務改善にもつながっている。

## 4 総合的な学校関係者評価

子どもたちがあいさつしてくれることがうれしい。大人があいさつすることで見本を見せていきたい。PTA やキッズクラブ、自治会が主催する地域活動への参加は、子ども同士のつながりだけでなく、保護者同士がつながる機会にもなっていると思っている。地域活動に積極的に参加してほしい。地域ボランティアは、子どもたちといっしょに活動する機会を増やして、子どもたちに顔が見える取り組みにしていきたい。学校は、ひとりひとりに合わせたタブレット活用を進めるとともに、授業や体験活動などを通して子どもの興味や視野を広げる学習をこれからも大切にしていきたい。

## 5 評価結果

		自己評価		学校関係者評価
分野・領域	評価項目(取組内容)	評価結果及び分析	改善の方策	学校関係者評価委員会の意見
教育目標 教育課程 組織運営	学校教育目標の実現	保護者アンケートより学校教育目標を基本にした日頃の教育活動や授業実践等について、肯定的な理解を得られていることがわかる。「あいさつロード」の取り組みや、3 学期から掃除を隔日にして、児童が思っていることを話して共感しあえる場として設定した「すずかけタイム」の取り組みの成果も出てきている。 教師が子どもと向かい合う時間を持つよう、勤務時間の適正化や業務改善に努めてきた、保護者・地域にも理解が得られるよう情報提供しながら、行事や教育課程の見直しを進めている。 学校だけでなく PTA、学校支援ボランティア、キッズクラブ、子ども安全パトロールなど、学校・家庭・地域が大きな輪で子どもたちを支援できることが本校の強みだと考える。引き続き、家庭・地域と連携・協力しながら子どもたちが安心して成長できる教育環境を整備していきたい。	ホームページや学校だよりだけでなく、まなびポケットを情報発信の場として活用することで、児童の教育活動をさらに分かりやすく伝えていく。 時程表や教育課程の見直しなどを行い、児童も教師も落ち着いてじっくり学習や行事に臨むことができるようにする。 学校・家庭・地域との連携・協力をさらに強くし、児童への支援の輪をひろげていく。	学校行事や授業の参観を通して、児童の優しさや学校のあたたかい雰囲気を感ずることができる。 これからは児童が「学校が楽しい」と思える活動を大切にしてほしい。「すずかけタイム」は良い取り組みだと思う。 学校の多忙化を感じる。地域には児童のために協力したいと思っている人が必ずいる。地域ボランティアや学校支援ボランティアの情報を積極的に発信していくことが大切だと思う。
学習活動	主体的・対話的で深い学び	児童がタブレットを授業で使う習慣が定着し、タブレットを活用することで、自己の興味関心に応じた様々な自主学習が展開されるようになってきた。 児童アンケートでは、「学習の中で自分の思いや考えを相手に伝えることができていく」の肯定的評価の割合が全学年で増加した。 読書が好きな児童は多いが、全体として児童の読書時間の減少傾向が見られる。毎月の「家庭読書の日」、毎週金曜日の朝に読書タイムを入れることで、自発的な読書につながっているが、さらに継続的な取り組みが必要である。	ICT 活用を進め個別最適な学習、さらには、個々の児童の学びをつなぐ学習の在り方を探っていく。 自分の考えを表出する場の設定を今後さらにひろげていく。 本を対話のきっかけにしたり、コミュニケーションツールにしたりして、読書活動の活性化につなげていく	タブレットを活用することで宿題や家庭学習の内容の幅がひろがっていることは良いことだと思う。ICT の活用推進と同時に鉛筆で書く学習も大切にしてほしい。子どもは自分の興味のあることに集中して情報を得ようとし、社会の全体像をとらえていない。 子どもの視野を広げる学習が大切だと思う。
生徒指導	自主・自立による創造	学校いじめ防止対策基本方針に基づき、いじめをしない、させない、ゆるさないを合言葉とし、いじめ見逃しゼロを目指して、組織的対応を実践してきた。情報モラル学習では、発達段階に応じた内容(中学年対象・高学年対象・6年生対象)で学習会を実施することができた。 必要に応じて SC や SSW に協力・アドバイスを依頼し、連携した取り組みを行うことができた。 不登校や登校渋りの児童の安心できる居場所のひとつとして、サポートルームを設置し、運用を進めることができてきた。	SC、SSW との一層の連携を進める。学年、学団の縦・横のつながりを意識し、定期的に情報交換を行うなど、全職員で情報を共有した組織的な対応を徹底する。 サポートルームの活用では、担任と子どもサポーターを中心とした支援体制を整備し、児童の居場所づくりとともに学習の場設定を充実させていく。	サポートルームが子どもたちにとって活力が生まれる場所になっていることが良いと思う。不登校や登校渋りの要因が多様化してきており、児童だけでなく保護者・家庭へのサポート体制の必要性を感じる。 情報モラル学習会は、児童だけでなく保護者や大人もたくさん参加して学習する必要がある。

特別支援教育	個別指導の充実 児童理解の共有	個々の「困り感」に応じたアプリやプリントを活用することで、学習意欲の向上につなげることができた。タブレットの「ドリルパーク」を算数の単元導入前に活用することで、児童の実態把握と個に応じた支援に活かすことができた。 全ての児童を全職員で育て・支援することを目指して取り組んできた、校内支援委員会が中心となり、児童理解研修やケース会議を開催し、教職員の共通認識のもと支援の在り方を検討し、組織的な支援を進めることにつなげた。また、外部関係機関との連携により、有効な支援の在り方について助言を得ることができた。	「困り感」チェックシートを活用することで、児童一人一人の「困り感」を丁寧に見取ることができるようにしている。 専門員相談や巡回相談など外部機関を積極的に活用していく。SC やSSW、医療機関との連携を一層進めることで、児童理解と確かな支援体制の充実を図る。	学校行事の中で、個に応じた支援が必要な児童に丁寧に支援しているところがすごく良いと感じている。毎年継続して取り組んでいる「ふれあいコンサート」や「じぶんをいきるためのるーる」の授業は、児童が多様性と良い出会いをする機会だと思っている。これからも取り組みは続けていってほしい。
研究・研修	主体的に学ぶ児童の育成 教員の授業力向上	・めあてやふり返りを意識した授業スタイルが定着している。 ・研究の中心に「思考力育成」を位置づけ、思考力の可視化を意識した授業改善を行うことで、児童の思考力が高まっていると考えられる。また、6年の全国学力学習調査の問題や中学校の教科書を使った研修を行い、現在求められている思考力の形や9年間の見通しを持って指導することの大切さを共通理解することができた。	児童が身に付けた思考力を活用し、自分の考えを表出する場の設定を今後さらに広げていく。 学びの交流場面でのICTの効果的な活用の在り方についても検証を進めていく。 幼小中の校種間で授業を参観し合う機会を増やす。	学習の中で児童が自らの考えをもち、友だちと共に学び交流することで学びを深めていることがわかった。 幼小中の校種間で授業を参観し合う機会を増やすことは良い取り組みだと思う。
家庭地域との連携協働	学校運営協議会を核とした 連携 学校支援ボランティア活動 の拡充	・学校運営協議会委員の方々に授業を参観していただき、児童の実態に応じたアイデアを出してもらうことで、学習の場設定をひろげていくことができている。 ・学校支援ボランティアとの連携し、器楽・マシンなど支援をいただいた。また、「ありがとう集会」を開催し、全校児童がボランティアさんに感謝の気持ちを伝えることができた。	地域ボランティアの方と児童が一緒に活動し、地域の方たちの顔が見える取り組みを増やしていく。 学校支援ボランティアの取り組みについて、保護者に積極的に情報発信し、学校支援ボランティアの認知度を上げ、地域連携推進の機運を高めていく。	学校行事に参加したり、児童と一緒に活動したりすることで地域は元気をもらっている。PTA やキッズクラブ、自治会が主催する地域活動への参加は、子ども同士つながりだけでなく、保護者同士がつながる機会にもなっていると考える。児童や保護者には、地域活動にも積極的に参加してほしい。